岐阜協立大学論集 59 巻 1 号（2025 年）
The Journal of Gifu Kyoritsu University, Vol.59, No.1（2025）

看護職を目指す高校生の地元への就職意識を高める対策の検討

－岐阜県飛騨・高山地区を主対象とした事業のアンケート結果から－

水上　和典（岐阜協立大学看護学部）
北村　美恵子（岐阜協立大学看護学部）
緒方　京（岐阜協立大学看護学部）

キーワード：地元への就職意識, 看護職, 高校生, 飛騨圏域, 地域医療

抄　録

看護職を目指す高校生に、飛騨・高山地区を主対象とする事業を企画し、参加者アンケートの結果から地元への就職の意向を高めるための対策を検討した。

事業は看護職の魅力や大学で看護を学ぶことの理解などから看護職への関心を高めることを目的とし、本学看護学部の見聞ツアー（ワークショップ式セミナー）と飛騨・高山地区で開催される飛騨メディカルハイスクール事業での本学看護教員による講座を実施した。事業参加者は延べ 25 名で、調査協力に同意を得られた人を対象に事業評価および地元への就職に関する意識を調査した。

事業評価では 2 事業とも満足度が高い結果であった。地元で看護職として働くことを決めるための支援や環境の必要性については「給料・年収」、「就職先施設の雰囲気」、「子育てに理解がある職場環境」が特に重視されていた。自由記述では「先輩と話せて良かった」、「自分が育った地域に恩返ししたい」などの感想がみられた。

今回の結果から、高大接続や地域との連携により看護職の仕事や地域の医療体制・施設を深く理解できる機会の提供、給与などの待遇や仕事を継続しやすく子育てしやすい職場環境等の整備に加え、地元への愛着を育むなど多面的な対策の必要性が示唆された。

Ⅰ．緒言

少子高齢化に伴う生産年齢人口の減少が著しい近年のわが国の地方社会において、地域医療の存続・維持は、最重要かつ喫緊の課題のひとつである。地域医療とは、地域に暮らす住民の健康維持・増進を地域全体の医療・保健・福祉の連携により支える体制のことであり、地域包括ケアシステムに根差した考え方である。また、人びとの生命・健康、そして生活の質に直結するものであり、社会生活に与える影響も大きい。これらの背景から高齢化や過疎化が進む地方では、病院の統合や機能分化といった医療再編によって、継続的・安定的に医療従事者を確保できる体制づくりが進められている。

人口の減少は医療・福祉分野においても深刻な人手不足をもたらし、2040 年度には医療・福祉分野の就業者に 96 万人の人材不足が見込まれている[1)]。岐阜県では飛騨圏域の生産年齢人口の減少が著しく、少ない働き手で高齢者を支える人口構造となっている[2)]。2024 年の飛騨圏域の老年人口割合は 37.0%を占め、

全国の29.3%を7.7ポイント上回っている[3]。さらに、2045年の推計[4]では、老年人口割合が45.3%に上昇し、生産人口の44.9%を上回る結果となっていることから、医療・福祉分野を支える看護職の高齢化が進むことも予測される。地域医療の担い手自身が高齢化かつ減少していく状況のなか、飛騨圏域における若手看護師の確保は、早急の対応が求められる逼迫した課題といえる。

このような現状を踏まえ、飛騨圏域における行政機関は様々な施策により飛騨の活性化を図る試みに取り組んでいる。高山市では5年ごとに飛騨地域の高校3年生を対象に、「将来の進路や仕事に関する意識・希望アンケート調査」（以下、高山市の調査とする）を実施し、政策立案の基礎資料としている。令和6年の高山市の調査[5]では、91.3%の回答者が高山市に愛着を感じ、80.1%の回答者が居住地域への継続移住やUターン意向を示している。また、大学進学希望者が「将来やりたい仕事の業種」は「医療」が27.6%で最も高い結果となっている。この傾向に基づき、飛騨圏域では2022年度より飛騨メディカルハイスクール事業が開催されている。この事業は行政と医療機関が一体となって、飛騨圏域の高校生などに医療職や地域医療について「知る」「体験する」「目指す」機会を提供し、将来の医療人材の育成・確保につなげることが目的とされている。その一方で、飛騨圏域の看護師養成には四年制大学は設置されていないため、大学進学希望者の受け皿がない状況にある。現代の看護基礎教育には、多様なリベラルアーツ教育による豊かな人間性や、高度な医療に適応できる看護実践能力の育成が求められている。その実情に伴い2024年度の看護系大学・養成校の入学状況では、大学の充足率は97.6%、3年課程は82.0%、2年課程は65.1%との報告があり[6]、大学志向は今後も続くことが見込まれている。大学進学志向性に加え、18歳人口の減少も重なり、看護職志望者が飛騨圏域外に流出する傾向が常態化しない更なる対策が必要である。

本研究は、看護職を志す高校生に向けて開催した、看護系大学への進路選択の一助とするための岐阜協立大学見聞ツアー（ワークショップ形式のセミナー）と、看護職の魅力を理解するための飛騨メディカルハイスクール事業の参加者アンケート結果から、地元就職の意向を高めるための対策を検討した。看護系大学への進学、および就職意識を把握し、地元への就職意向を高める方策に反映することは、住み慣れた地域で大切な人々と暮らしながら看護職としての人生設計を実現するための進路の視野を広げる効果が期待できる。加えて、この成果は岐阜県の将来的な地域医療体制の構築にとっても有益であると考える。

なお、本研究の実施にかかる倫理的配慮として、見聞ツアーでは高校訪問での説明時とツアー開始時に、飛騨メディカルハイスクール事業では講演開始時に、開催の目的と経緯、および研究の趣旨と参加者アンケートの協力について文書と口頭で説明した。アンケートの回答は、参加者の自由意思に基づいて決定でき、協力しなくても不利益はないこと、匿名性の保障、結果の関連学会等への公表予定などを参加者に説明し、強制力が働かないよう会場外での回答期間を設けた。参加者の同意は、Webによるアンケートの送信をもって同意とみなした。以上について、事前に研究者の所属大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：EA-2024-003）。また、手指消毒用アルコールの設置や常時換気など感染防止対策に努めた。なお、事業内の写真撮影と公表予定についても事業開始前に説明して了解を得ている。

Ⅱ．岐阜協立大学見聞ツアーの概要とアンケート結果

1.岐阜協立大学見聞ツアーの概要

令和6年度岐阜県私立大学地方創生推進事業の未来を担う看護職育成事業のひとつとして、ワークショップ形式の「岐阜協立大学見聞ツアー」（以降、見聞ツアーとする）を企画した。この企画の目的は、大学で看護を学ぶということの意味や意義を理解すること、地域医療の魅力について知ること、看護職への関心を高めることである。

参加者の募集は、岐阜県高山市の一般財団法人飛騨高山大学連携センターの協力により、飛騨・高山地区の高校生に見聞ツアーの周知ができるよう、高校訪問で説明する機会を得た。また、飛騨・高山地区のフリーペーパーに企画を掲載してもらうとともに、公共施設や商業施設に見聞ツアーのポスターの貼付をおこない募集した。加えて、飛騨・高山地区に関する理解を深めるために西濃地域の高校へも見聞ツアーの案内を実施した。案内に使用したチラシ・ポスターを図１に示す。６月中旬から飛騨・高山地区で募集を開始、７月下旬からは西濃地域の高校へも案内をおこなった。この結果、参加者は高校生８名（飛騨・高山地区５名、西濃地区３名）、保護者３名であった。ツアー当日は、飛騨・高山地区の参加者は各地区より貸切バスで本学まで送迎し、西濃地区からの参加者は各自で直接参加してもらった。

2. 見聞ツアーの内容

見聞ツアーのプログラム内容を表１に示す。講話は講義形式とし、看護体験と交流会は小グループになり在学生との距離を縮めておこなった。大学内の見学は在学生の引率の元、キャンパス内を案内して学修環境を説明し、看護学生が実際に演習などで学ぶ様子を口頭で紹介した。

図１　ツアー案内のチラシ・ポスター

表１　見聞ツアーのプログラム内容

◆講話
・教員より…「大学で学ぶ」・「看護」とは（10分）
・2名の高山出身の学生の話…高校との学び方の違いや楽しみ（15分）
・高山出身卒業生の話…地元に戻って感じた看護のやりがい（20分）
◆看護体験と交流会（45分）
・血圧測定の意味と測定方法
・何でも座談会
◆大学内の見学（10分）
◆アンケートの依頼

＜　ツアー当日の様子　＞

看護大学での学びについての説明

高山で働く卒業生の話

在学生との交流会

血圧測定の体験

3. 参加者アンケートの実施

アンケートの実施は、見聞ツアーのプログラムの終了時に研究依頼文書内の二次元コードからアンケート内容を読み取ってもらい、入力方法を説明し、1 週間以内の回答を依頼した。

アンケート内容は、学年、自宅の圏域の他、事業評価として、見聞ツアーを知った方法、開催内容の満足度、見聞ツアー参加による看護職への関心の高まり、大学で看護を学ぶ意識の変化などを尋ねた。加えて、就職意識に関する内容として、高校・大学等の卒業後の就職場所の意向、地元で看護職として働くことを決めるための支援や環境の必要性（以下、地元で働く支援や環境の必要性とする）について尋ね、参加した感想の自由記述を求めた。地元で働くための支援や環境の必要性は、既存の文献等を参考に 20 項目の支援と環境を設定し、「重要である」から「重要でない」の 4 段階のリッカート尺度で回答してもらった。

分析は SPSS　Statistics28.0 を用いて、各項目の記述統計、および地元で働く支援や環境の必要性については強制投入法による重回帰分析を行った。

4. アンケート結果

アンケートは高校生 7 名と保護者 3 名から回答が得られた。本ツアーの参加の動機は、飛騨・高山地区では高校を通じて配布されたチラシの割合がやや多かった（表 2）。開催内容の満足度は、各プログラムに対して全員から満足の旨の評価を得られた。参加による看護職への関心の高まりの効果では表 3 に示すように看護職への関心が高まったとの回答が多かった。

高校・大学等卒業後の就職場所については、高校生、保護者ともに地元の意向もあるが、飛騨圏域の高校生は「地元で働きたいと思わない」との回答も見受けられた（表 4）。地元で働く支援や環境の必要性では、高校生と保護者とも「給料・年収」や「医療内容」、「就職先施設の雰囲気」、「就職後の教育・研修制度」、「子育てに理解がある職場環境」を重視している結果であった。一方で、友人・知人や教員等の勧めはあまり重視していない意向であった（図 2－1、図 2－2）。

表 2　ツアー参加の動機（複数回答あり）

自宅地域	動機となったもの	子	親
飛騨・高山地区	広報、フリーペーパー	1	
	高校で紹介されたチラシ	2	1
	新聞の記事・広告	1	
岐阜・西濃	高校で紹介されたチラシ	1	2
	本学のオープンキャンパス	2	
	高校の先生からの紹介	1	
	高校の掲示板	1	

表 3　ツアーに参加して看護職の関心が高まったか

	子	親
高まった	4	2
少し高まった	3	
どちらともいえない		1

表４　卒業後の就職場所の意向

	就職先	飛騨圏域	岐阜西濃
高校生	地元で働きたい	2	2
	地元で働きたいと思わない	2	
	まだわからない		1
親	地元で働いてほしい	1	1
	まだわからない		1

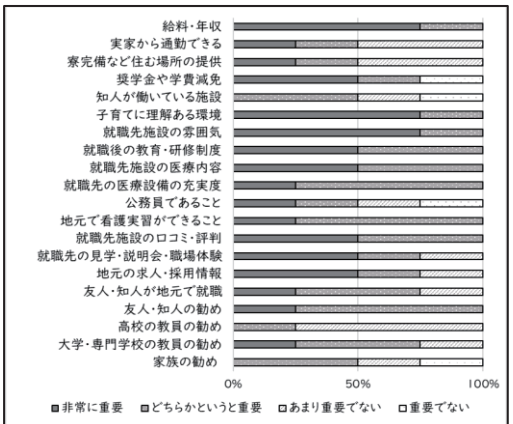

図2-1　地元で働く判断についての影響（高校生）

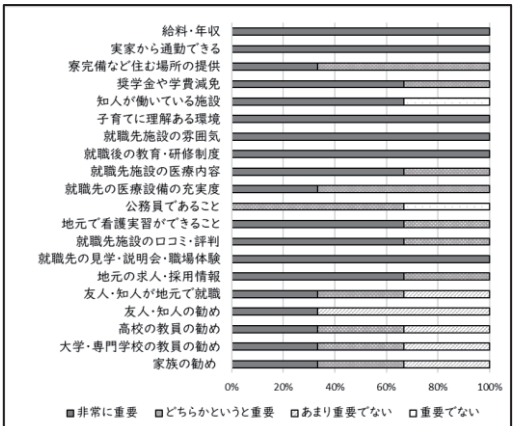

図2-2　地元で働く判断についての影響（親）

次に、見聞ツアーの参加によって看護職への関心や大学で看護を学ぶ意識の変化について、どの要因が寄与したのかを地元で働く支援や環境の必要性の各項目について重回帰分析した。ただし、回答数が少ないため、分析結果は傾向を捉えるための参考とした。看護職への関心を高めることに影響が大きかったのは、「友人や知人（先輩など）の勧め」（β=.717）や「就職先施設の医療設備の充実度」（β=.649）、「実家から通勤できること」（β=.468）であった（表5-1）。看護を学ぶ意識を高めることに影響が大きかったのは、「家族の勧め」（β=.799）や「実家から通勤できること」（β=.552）、「就職先施設のロコミ・評判」（β=.501）であった（表5-2）。

表5-1　看護職への関心の高まり

	非標準化係数		標準化係数
	B	標準誤差	ベータ
(定数)	-1.096	0.000	
家族の勧め	0.140	0.000	0.196
友人・知人（先輩など）の勧め	0.761	0.000	0.717
友人・知人が地元で就職すること	-0.605	0.000	-0.631
就職先施設のロコミ・評判	0.173	0.000	0.129
公務員であること	0.110	0.000	0.180
就職先施設の医療設備の充実度	0.870	0.000	0.649
寮完備など就職後に住む場所の提供	-0.233	0.000	-0.288
実家から通勤できること	0.392	0.000	0.468
給料・年収	-0.060	0.000	-0.036

表5-2　看護を学ぶ意識の変化

	非標準化係数		標準化係数
	B	標準誤差	ベータ
(定数)	-2.372	0.000	
家族の勧め	0.884	0.000	0.799
友人・知人（先輩など）の勧め	0.628	0.000	0.380
友人・知人が地元で就職すること（看護職に限	-0.163	0.000	-0.109
就職先施設のロコミ・評判	1.047	0.000	0.501
公務員であること	-0.163	0.000	-0.172
就職先施設の医療設備の充実度	0.465	0.000	0.223
寮完備など就職後に住む場所の提供	-0.140	0.000	-0.111
実家から通勤できること	0.721	0.000	0.552
給料・年収	-1.093	0.000	-0.419

また、見聞ツアーに参加した感想では、「とても良い仕事だと感じた」、「先輩と話ができてとてもよかった」、「看護師になるのはとても大変なことだとはわかっているつもりでも、いざいろんな話を聞いてみると実感が湧いた」などが記述されていた。

Ⅲ. 飛騨メディカルハイスクール事業における本学の講座の概要とアンケート結果

1. 飛騨メディカルハイスクール事業における本学の講座の概要

本研究では、2024 年度の飛騨メディカルハイスクール事業の一環として、「『生まれ来るいのちと家族』を支える看護～聴く・触れる体験～」をテーマに、高山市で講座を開催した。講座のコンセプトは、生命誕生の神秘と尊厳を伝えるとともに、いのちの誕生前から女性や家族と関わりながら母児の健康を守り、新生児の胎外生活適応、親子の絆・愛着形成の支援を担う看護の仕事を理解し、関心を高める機会とした。実施日は高校生の夏季休暇中の 2024 年 8 月 1 日とし、90 分間の講座を本学教員 4 名（母性看護学教員、小児看護学教員、老年看護学教員）で運営した。

参加者の募集は、高山市の協力を得て飛騨メディカルハイスクール事業のチラシへの掲載およびホームページ等で紹介してもらった。講座内容に胎児モデル等に触れる演習を含めたため 16 名を定員として募集したところ、申込開始後数日で飛騨圏域の高校生 16 名の応募があり、当日の欠席者を除く 14 名が参加した。参加者の内訳は、1 年生 2 名、2 年生 5 名、3 年生 7 名であった。

2. 講座の内容

講座内容を表 6、講座の様子を写真で示す。講演は、受精から始まる胎児の成長を写真で提示したり、母親の心理的変化や母子相互作用、また女性の生き方の多様性などを模擬授業形式で解説し、いのちの誕生や新しい家族を迎える人々への支援、女性の健康に携わる看護職の魅力を、講師の看護職としての実務経験や大学での看護教育の様子を交えて紹介した。演習では、参加者が希望する内容を演習できるよう、小グループに分かれ、教員が個別に説明しながら体験してもらった。演習項目の他、妊娠月齢とともに成長する胎児モデルを展示し、実際に触れたり抱っこして重みを感じたりできるように配置した。ミニおしゃべり会は、参加者全員が話せる機会とした。全員の発言のあと、各教員から参加者へ、看護職の役割や遣り甲斐、看護を目指すことの面白さなどについてメッセージを伝えた。

表 6　「『生まれ来るいのちと家族』を支える看護～聴く・触れる体験～」講座内容

◆	母性看護学教員による講演（40 分）：生命誕生の神秘、母と子の絆と愛着形成、現代女性の生き方の多様性、母子・家族に求められる看護職による支援
◆	演習（20 分）：①胎児モデル・妊婦体験、②妊婦腹部触診・聴診、③新生児バイタル測定、④ベビーモデル抱っこ・オムツ交換
◆	ミニおしゃべり会（20 分）：参加者からの質問・感想、教員から参加者へのメッセージ
◆	アンケートの依頼

＜当日の会場の様子＞

会場全体の様子

講演風景

演習風景：妊婦モデルでの胎児心音聴取

演習風景：ベビーモデルでのバイタルサイン測定

3. 参加者アンケートの実施

アンケートは、講座開始時に研究の趣旨と倫理的配慮について説明し、講座終了後から 10 日間以内の回答を依頼した。アンケート内容は、学年の他、事業評価として、本講座を知った方法、講座内容の満足度、講座参加による看護職への関心の高まりなどを尋ねた。就職意識に関する内容は、見聞ツアーのアンケートと同項目にした。分析は、Microsoft Excel による各項目の記述統計を行った。

4. アンケート結果

アンケートは、14 名から回答が得られた。

事業評価に関する質問項目では、「本事業を何で知ったか」（複数回答可）の設問に対し、「飛騨メディカルハイスクールの事業のチラシ」との回答が 14 名で最も多く、次いで「高校の先生からの紹介」が 2 名であった。講座内容の満足度では、「教員の講演」、「教員からのメッセージ」がそれぞれ「とても満足」13 名、「まあまあ満足」1 名で最も満足度が高く、「聴く・触れる体験」は「とても満足」12 名、「まあまあ満足」2 名、「ミニおしゃべり会」は「とても満足」8 名、「まあまあ満足」5 名、「どちらともいえず」1 名であった。参加による看護職への関心の高まりでは「高まった」13 名、「少し高まった」1 名であった。

就職意識に関する質問項目では、高校・大学等卒業後の就職場所については、「迷っている」と回答した人が 7 名、「地元で働きたいと思う」5 名、「地元で働きたいとは思わない」1 名であった。地元で働く支援や環境の必要性については図 3 に示す。「重要である」と回答した人が最も多かったのは「給料・年収」で、以下「就職先施設の雰囲気」、「子育てに理解がある職場環境」の順であった。

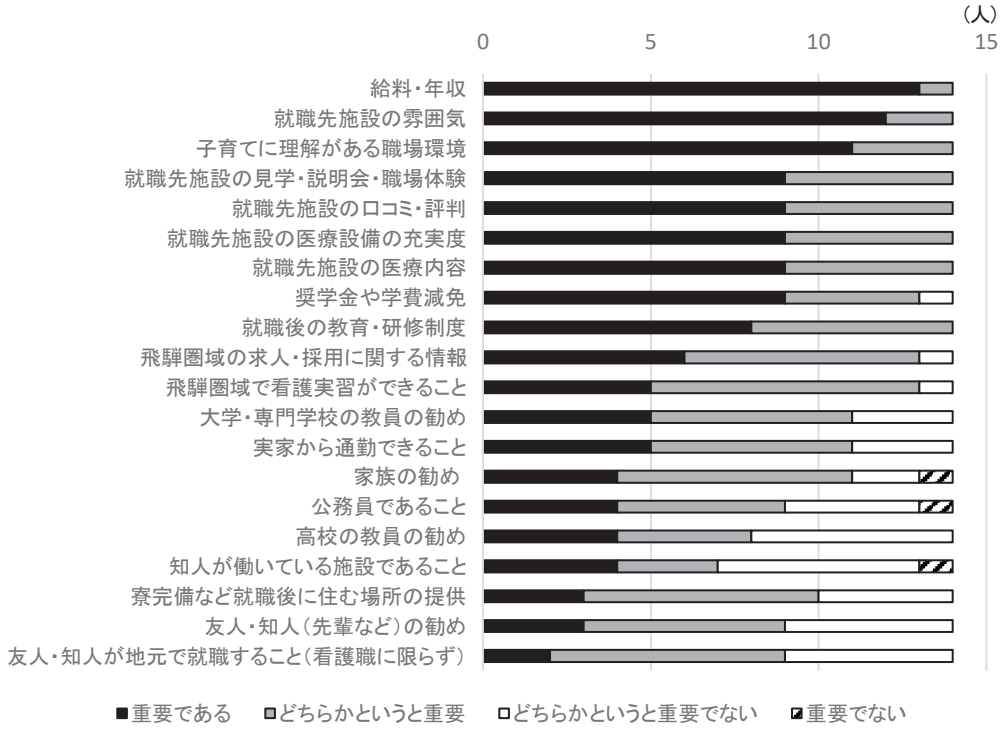

図３　地元で看護職として働くことを決めるための支援や環境の必要性

講座の感想を求めた自由記述の回答を表７に示す。自由記述は10名が回答していた。表中のカテゴリーは、研究者が参加者の自由記述内容の類似性、共通性から見出して命名したものである。

表７　飛騨メディカルハイスクール事業における本学の講座参加への感想（自由記述）

カテゴリー	参加者の記述内容の要約
医療職に対する関心への効果	◆ 学校の授業では習わないことも聞けて本当にためになり，医療職についてどんどん興味が湧いた。 ◆ 普段できないことを体験できてとても楽しかった。 ◆ 看護職のよさを改めて実感することができた。 ◆ 私は特に高齢者が増加している飛騨で高齢者に関わる職業につきたいと考えている。今回の講義や体験を通して実際に赤ちゃんや妊婦さんについて知ることができてとてもよかった。
飛騨圏域での就職に対する考え	◆ 自分が育った地域に恩返ししたい。 ◆ 子育てしながらでも働きやすい仕事環境がほしい。 ◆ 医療従事者不足が問題となっていて十分な医療が患者さんに届けられなくなる可能性があると聞いて，飛騨地域で看護職者としてたくさんの人を支えられる人になりたいと考えている。 ◆ 少し前まで地元では就職したくないと考えていたが，最近地元で自分を育ててくださった人たちを医療の面から支えていくのもいいのかなと思い，地元で就職もいいかもしれないと思い始めている。 ◆ 地元の企業で働くことで奨学金の負担を減らすことや職場の環境など制度が充実していたら，地元で就職したいと考える人も増えるのではないか。

Ⅳ. 考察

高山市の調査[5]では、地元への就職意向やいずれ地元に戻る意向は減少傾向にあった。しかし、飛騨圏域で就職したい理由には「地元が好き」が 60.4%で最も高く、住んでいる地域への愛着は、8 割近くの高校生が「感じている」と答えていることから、郷土愛が育まれていることが窺えた。希望する進学先は、「大学」が 69.1%で最も高く、進学希望者が希望する仕事の業種は、「医療」が 21.9%で最も高かった。これらの結果を踏まえ、今回の見聞ツアーおよび飛騨メディカルハイスクール事業のアンケート結果を考察し、地元就職の意向を高めるための対策を検討する。

1. 高大連携体制の構築の必要性

今回の事業に参加した高校生は、見聞ツアー、飛騨メディカルハイスクール事業のいずれの参加者も参加によって看護職への関心が高まったと回答していた。参加を決めた時点で既に看護職に関心があったと推察されるが、「看護師になるのはとても大変とわかっているつもりでも、いざいろんな話を聞いてみると実感が湧いた」（見聞ツアー参加者）、「学校の授業では習わないことも聞けて本当にためになり，医療職についてどんどん興味が湧いた」（飛騨メディカルハイスクール事業の講座参加者）などの記述から、看護教育を窺い知る機会を得て、関心がより現実味を帯びた成果と考える。先述の高山市の調査の結果では、進学先および将来やりたい仕事の業種として、医療系への意向、および大学への進学希望の高さが報告されている。これらの背景から、高校生の看護系大学への進学の関心を一層高め、進路選択の深みを増す支援とするためには、飛騨圏域の高校と看護系大学が連携し、看護職や看護教育への理解を促進する必要があると考える。

内容の満足度をみると、2 事業のいずれの満足度も高い評価であったが、特に見聞ツアーの「在学生との交流会」では、「先輩と話ができてとてもよかった」との自由記述もみられた。アンケートへの回答であるため会話の詳細は不明であるが、見聞ツアーには飛騨圏域出身の本学在学生や、地元である飛騨圏域に戻って看護職として活動している本学卒業生が参加しており、高校生が将来像をイメージ化する効果をもたらした可能性がある。高大連携は、大学の学びを高校生に体験してもらうというアカデミック・インターンシップの側面や、高校の学びと大学の学びをつなぐ教育の高大接続の意味があり[7]、本事業は高校生にとって、より参加しやすい体験型であり、高大の学びをつなげる事業としての意義があったと評価することができる。加えて、「事業参加による看護職の関心の高まり」への正の影響が最も大きかった項目は、「地元で働く支援や環境の必要性」のなかでも「友人や知人（先輩など）の勧め」であった。学生生活や卒業後の社会人の具体的なイメージの形成により、自分自身に引き寄せて考えられる進路選択の機会となるよう、自校・自地域に最適な高大連携体制の構築を目指していく必要がある。

2. 地域への愛着を育む方策

本研究の 2 事業のアンケート結果では、地元で看護職として働くための支援や環境の必要性として「給与・年収」が重要視されていた。先述の高山市の調査においても、飛騨圏域の高校生は地元への愛着を感じているものの、地元への就職意向は減少傾向にあり、その背景には都市部と比較した賃金等の就業環境の差異が指摘されている。その一方で、本研究の結果では「就職先施設の雰囲気」、「就職後の卒後教育・研修制度」、「子育てに理解がある職場環境」も重視されていた。これらは、同じ職場で勤務を継続しながらキャリアアップを図ることや、住み慣れた地域でワークライフバランスを実現しながら結婚・出産後も長

く看護職として働きたいとの意向の表れと推察できる。したがって、長期的な人材確保の観点からも、キャリア形成や子育てと看護の仕事を両立できる職場環境づくりの重要性を再認識する必要がある。給与等の待遇面に加え、地元への就職による自己の人生への効果や地域貢献の意義を高校生自身が見出せる支援策の検討が有用と考える。

飛騨メディカルハイスクール事業の参加者の感想では、「自分が育った地域に恩返ししたい」、「医療従事者不足が問題となっていて十分な医療が患者さんに届けられなくなる可能性があると聞いて、飛騨地域で看護職者としてたくさんの人を支えられる人になりたいと考えている」、「地元で自分を育ててくださった人たちを医療の面から支えていくのもいいのかなと思い、地元で就職もいいかもしれないと思い始めている」といった飛騨圏域での就職に対する考えや思いの変化が記述されていた。先述の高山市の調査で報告されている地域の高校生の地元への愛着が本研究結果からも窺える。地元への愛着を育むためには、地域活動への積極的な参加や地域住民との交流を深めることが重要であり、桝田ら[8]や伏木ら[9]の報告ではボランティア活動等への参加と地域への愛着との関連も示されている。地域活動への参加は、地域住民との交流を深めるだけでなく地域課題解決への貢献にもなることから、地域への愛着を育む機会となる。地域への愛着の構成概念のひとつに、人とのつながりを大切にする思いが挙げられている[10]。高校生の地元への愛着の基盤は、幼少期からの人的環境や文化などとのつながりが育んできたものと考える。これらを地元の就職意識へ発展させるには、一時的なイベントや大学内での看護教育のみでなく、看護教育を行う大学が地元の高校、行政や地域医療施設などと協働し、地元地域の医療事情などに関する教育体制を構築することが不可欠である。つながりを大切に思う気持ちを育み、地域の良さを守り、地域をより良くしたいという思いが育成できるキャリア教育の充実が必要である。そして、人や地域のつながりに視点をおける人材は地域医療を担う者として望ましい資質を有し、地域医療全体の質の向上に繋がると考える。

3. 看護職志望者が地元への就職意向を高めるための今後の課題

1）高校生に対しては、高大連携の実現を目指すためのプロジェクト（大学の教員による出張講座や大学生と高校生の共同授業など）を検討する。

2）本学の学生に対しては、地域への愛着を育むための「キャリア開発演習」、選択科目である「医療ボランティア活動論」やボランティアサークル等で、地域における多様な医療体制と看護職の役割の学修や、充実した地域活動により学生が主体的に地域活動の意義を考えることができるプログラムを検討する。

Ⅴ. 結論

本研究では、看護職を志す高校生を対象に、看護系大学である本学の見聞ツアー（ワークショップ形式のセミナー）と、飛騨圏域で開催されている飛騨メディカルハイスクール事業での講座を開催し、参加者アンケート結果から地元への就職の意向を高めるための対策を検討した。地元への就職の意識づけには、地元の高校生に選ばれる地域となるべく、地域と大学の連携によって地域の医療体制や施設を深く理解できる機会の提供に加え、給与などの待遇や子育てしやすい職場環境等の整備を促進するなど、多面的で重厚な対策と支援が重要であると示唆された。高校生へは医療の高度化や多様化に対応できる看護職の養成課程や四年制大学進学の意義の理解、看護系大学での実際の学びや看護実践を現場で体験できる事業などを積極的に推進する必要がある。看護学の学修を進めている学生へは、地域医療の志向性を高めるキャリア形成教育やボランティア活動等が有用と考える。これらの事業は地域の魅力の実感、地元への愛着を育む取り組みの導入が不可欠である。飛騨・高山地区においては、看護系大学が行政や飛騨高山大学連携セ

ンター、地元の高校等との持続可能な協同体制を模索し、飛騨圏域の地域医療を担う看護職人材の確保を具現化する役割が求められる。

なお、本研究は令和６年度岐阜県私立大学地方創生推進事業費による助成を受けて実施した。

謝辞

本研究の事業に参加し、アンケート調査にご協力いただいた高校生と保護者の皆様、および事業開催にご協力いただいた飛騨・高山地区の高校、市役所、飛騨高山大学連携センターの皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

1）厚生労働省（2022）．令和４年版厚生労働白書，pp. 7．

2）岐阜県（2016）．岐阜県地域医療構想，https://www.pref.gifu.lg.jp/page/13850.html (accessed 2025.2.13)

3）岐阜県．令和５年岐阜県人口動態統計調査結果,2025.3.18
https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/437942.pdf (accessed 2025.3.22)

4）二次医療圏別患者推計 飛騨 - 岐阜県公式ホームページ,
https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/339416.pdf (accessed 2025.2.13)

5）高山市（2024）,将来の進路や仕事に関する意識・希望アンケート調査,
https://www.city.takayama.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/006/854/r5sougousenryakuhoukokusyo.pdf (accessed 2025.1.8)

6）厚生労働省（2024）.令和６年度看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査,2025.3.18
https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00450141&tstat=000001022606&cycle=8&tclass1=000001222421&tclass2=000001222423&tclass3val=0 (accessed 2025.3.24)

7）柳原眞知子，板山稔，古澤弘美，他（2022）．高大連携ワーキンググループによる「学びの看護体験」の実践報告，長岡崇徳大学研究紀要，3, 66-71.

8）桝田聖子，金谷志子，大井美紀，他（2009）．都市部と農村部における高齢者の地域見守りネットワーク活動の実態，甲南女子大学研究紀要（看護学・リハビリテーション学編），3, 33-44.

9）伏木康弘，大西浩文，大浦麻絵，他（2012）．地域ボランティア参加意志を持つ高齢者の特性　石狩，空知振興局管内４市３町に在住者への調査，北海道公衆衛生学雑誌，25（2）, 139-146.

10）酒井太一，大森純子，高橋和子，他（2016）．向老期世代における“地域への愛着”測定尺度の開発，日本公衆衛生雑誌，63（11）, 664-674.